

小学校は地域みんなの学校

「教育ファームで変わるのは子どもたちだけじゃない!」

上越市立里公^{さとこう}小学校の子どもたちは、“子ども米サミット”に地元新聞広告掲載と、教育ファームで学んだことを次々に発信。そんな子どもたちを通じて、先生たちは教員としてのやりがいと能力をアップさせ、保護者たちは学校をより身近に感じることができるようになり、そして指導に当たる農家たちは農業をつづける意志を一層確かなものとしていく。

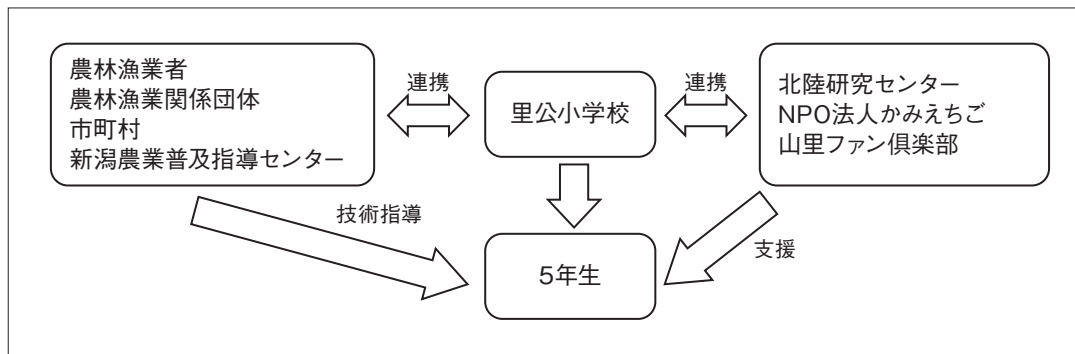
上越市立里公小学校

取組主体

- 名称：新潟県上越市立里公小学校
- 担当窓口
担当課(者)：里公小学校 校長 春日 良樹
住所：新潟県上越市三和区鴨井710
電話：025-532-2014 FAX：025-532-2396
E-mail：satokou@jorne.or.jp
- 団体等の属性：学校
- 構成員数：児童数 202 人
コーディネーター等：なし
- 活動内容を紹介するHPアドレス：<http://www.satokou.jorne.ed.jp/>
- 連携団体及び協力団体
属性：農林漁業者、農林漁業に関する団体、市町村、NPO法人



田起こし



取組地域及び地域の特徴

取組地域：新潟県上越市三和区

地域の特徴：

上越市三和区は上越地方の中央に位置し、“新潟米”の主要穀倉地帯を有する平地農村地帯である。地域では、五穀豊穰を祈る祭りや雨乞い地蔵による奇祭などの文化が伝承されているほか、ため池や谷内が残され希少種の水生植物が生育しているなどの特色があり、豊かな自然、安らぎ、人の笑顔があふれる地域である。

里公小学校児童は、半数以上がいわゆる新興団地から通学し、旧村部から通学する子どもであっても家業が稲作農家という児童は少数である。営農の大規模化が進み、緑豊かな農と食の大地に生活する子どもであっても、都市部と同様に農業や食育などの体験は不足している。

取組内容

(1)目的(目標)

里公小学校では、「勤勉」や「協働」、「芯の強さ」や「実直さ」、「共生」や「感謝」の心など、土に生きる人びとが営々として自らの内に蓄えてきた精神風土に着眼している。こうした精神風土を、教育活動においても大いに顕在化させ子どもの心に「ふるさと」を育むことを目標に掲げている。

(2)取組開始時期・経緯

- 農作業体験学習は、上越の学校の伝統であり過去10年以上は続けている。
- 平成20年度：「上越市教育ファームモデル事業推進協議会」を発足し、教育ファーム推進事業において、米づくりをする4つの小学校5年生、市民、農業関係者、行政関係者が一堂に会し、上越の米づくりの将来について話し合う「子ども米サミット」を開催した。
- 平成21年度：教育ファーム推進事業において実践してきた内容について、学習を仕組む教師の立場から、教育ファームをどう創造したのかをテーマに、参加5校の代表教諭による実践発表会を行なった。
- 平成22年度：「農の大地に根差し、子どもの心にふるさとを育む学校」をキャッチコピーに、生活科や総合的な学習の時間を中核に据えた学級カリキュラムを編成し、各教科・領域の関連を図りながら農にかかわる体験学習を継続している。



田植え

(3)対象作物：米、野菜

作物名・種類：水稻(うるち米5アール[コシヒカリ]、もち米 5アール)

選定理由：5年生の社会科では、「稲作農業」について学習するとしており、日本農業の現実や農の心・人びとの願いに着目させやすいということから、「米づくり」に着目した。

(4)具体的な取組内容

- 平成21年度(教育ファーム推進事業参加)
 - ・地域の篤農家より10アールの水田を借り、児童による米生産農家「いちばんばし」を設立。儲けは自由に使えるが、経費はすべて支払うこととし、独立採算制で稲作学習を進める。機械に頼ればお金がかかり、手作業では時間的に困難という矛盾のなかで学ばせる。「心を込めて手作業でつくる」「安全安心な無農薬栽培」という子どもらしい情緒的な側面を大事にしながらも、「営農の現実」「世の中の現実」に対峙させ、農業の在り方についてその子なりの主張の形成を促していった。
 - ・「米」を販売し経費を精算すると8万円近い「儲け」が出た。「儲け」をどうするか話し合ったが、結論を出せなかった。そこで、地域の農家の願いに触れる場を設定した。子どもは、「米余りを何とかしたい」という農家に共感し、米の消費拡大とお世話になった農家への恩返しを兼ねて「三和のお米が食べたくなるようなお弁当」づくりの経費に充てた。さらに米余りを克服するた



資料提供：上越タイムス

めに、儲けの一部を使って、地元新聞の紙面を買い取り、米の消費拡大に願いを込めた広告を出す。広告の内容は、「お弁当」の画像と子どもが考えたキャッチコピーである。地元新聞社は、子どもの取組みに感動し広告は大きく掲載された。

- ・本実践では、「農業機械と人間の知恵」、「機械を使う意味」、「化学農業の安全性と有機農法の限界」、「米余りや消費低迷」、「米のブランド化」など、農業の現実に学びながら、さまざまな学級ドラマが展開された。
- ・指導者の確保は、校長が年度当初に、近隣の生産者の方、JAの職員や生徒の祖父母などに依頼し、指導者は毎回指導に当たった。
- ・ほ場では、一人の指導者に対し約5人の子どもが指導を受けた。
- ・指導書(マニュアル)は配付せず、あらかじめ個人が情報収集し、自主学习し、作業に入る。
- ・給食が自校式のため、収穫した米や野菜を給食(収穫祭)として使用した。
- ・作業の日は、指導者側と学校側から安全管理について毎回事前に指導した。

○平成22年度

単元名「三和羅須地人協会～農の人宮澤賢治に学ぶ～」

- ・宮澤賢治が情熱を注いだ農業と芸術(演劇)を学びながら、農の人宮澤賢治の生き方を追体験。そして、賢治のように「人間にとって本当の幸せとは何か」を考えさせていく。そのために、10アールの水田を耕しコシヒカリともち米を育て、田打ち、田植え、田の草取りなどを手作業で行なってきた。また、昔の暮らしや棚田について学ぶため、NPO法人「かみえちご山里ファン倶楽部」を指導者に、中ノ俣地球環境学校で合宿し、農家の生活や農民の心について学んだ。収穫した米は、12月の感謝祭でお餅や炊込みご飯にして、お世話になった方々や地域の皆さんを招待して振る舞う予定である。
- ・賢治の童話『銀河鉄道の夜』を劇化する。子どもたちは農民賢治になりきって、監督したり劇作したり演じたりする。そして、11月20日(土)、上越市「学び愛フェスタ」で市民に向けて上演する。

(5)年間スケジュール

平成21年度		平成22年度	
5月下旬	田植え	5月中旬	田植え
6月	調べ活動	6月	中ノ俣棚田合宿
7月	中干し	7月	中干し
9月	稲刈り	9月下旬	稲刈り
10月	米の販売	11月	演劇発表I
12月	収穫祭	12月	収穫感謝祭
1月	弁当づくり	2月	演劇発表II
3月	活動のまとめ	3月	活動のまとめ

(6)参加者数・属性の実績及び推移

平成20年 5年生21名
 平成21年 5年生29名
 平成22年 5年生41名

(7)経費

平成20年度

農林水産省教育ファーム推進事業
 補助金 91万5985円

平成21年度

農林水産省教育ファーム推進事業
 補助金 36万8950円



生育調査

課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

課題1:

学校で進める教育活動としての農業体験への願いと、参画いただいている団体や篤農家の皆様の願いの間にズレが生ずる場合がある。例えば、「学校では授業の一環として栽培活動をするのであり、作物の育て方や農業の仕方を教えるのではない。生活科であれ総合であれ、教科・領域の目標達成のための学習活動である」という学校の主張と、「イネの花を見させたい、手植えもさせたい、〇〇も体験させたい」といった農業関係者の願いの間に軋轢が生ずる場合があるということである。

→対処法:4月に、お世話になる皆様と十分な話し合いをし、各担任の願いや学級経営の方針、農業体験を通して育てたい子どもの姿を共通理解する場を設定する。また、子どもの育ちや変容について、子どもの作品や手紙などで随時伝えることを、年間を通して継続する。つまり、農業関係者に各担任の学級づくりや授業づくりの協同参画者として参加してもらうのである。

課題2:

単なるイベント活動、農業「ごっこ」に終始し、「体験ばかりで学びなし」と揶揄される状況になってしまうことがある。

→対処法:世の中の本物、農業の現実に対峙させる活動を組織する。「子どもは人からしか学べない」という事実に着眼し、生産者・消費者・栄養士など、さまざまな人びととの出会いや対話を重視した活動を設定する。

これまでの成果

(1) 教員

- ・各学級担任のカリキュラム編成能力が高まり、特色ある学級経営がなされるようになって、「やりがい」を感じる教員が多くなった。
- ・話し合いや言語活動による追究を大事にした授業のできる教員が多くなった。
- ・実践発表や原稿の依頼を受ける教員が多くなり、そのことが教員としての誇りや志を育んでいる。
- ・教頭職のマネジメント力や職員指導の質が高まった。
- ・教育以外の異業種の皆さんと接する機会が増え、発想の視点が広がった。
- ・さまざまな施設や機関等とかかわる機会が増したことから、卓越した交渉能力を発揮する教員が出てきた。
- ・教員の栽培や飼育に関する知識が増えた。
- ・校区に出かけてフィールドワークをする教員が多くなった。

(2) 児童

- ・学校に来る楽しみが広がったと考えている子どもが多くなった。
- ・不登校であった子どもが、野菜の種まきや収穫に登校することができた。
- ・多くの人びととかかわることから、「あいさつ運動」の実践の機会が増えた。
- ・人前で発表することに躊躇しない子どもが増えてきた。
- ・大きなことをやり遂げることで得られる達成感を背景に、学校や自分たちの取組みに自信や誇りを感じている子どもが出てきた。
- ・偏食が減るなどの成果は顕著ではないが、残食を我関せずとしていた子どもの意識が高まり、声を掛け合い残さないようにする姿が散見されるようになった。
- ・高学年が低学年の面倒をよく見てくれる、全校仲の良い学校になってきた。

(3) 保護者・地域

- ・子どもの変容を通して、学校教育に理解を示すようになり、学校に目を向ける機会も多くなった（保護者の子どもを見る目が変わった）。
- ・学校が発行している各種便りから充実した子どもの様子が伝わるようになったり、保護者が学校に来る機会が増したりしたことから、クレーム電話などが減った。
- ・田植えや稲刈り等、保護者や地域民が参加を楽しむようになった。
- ・子どもの取組みに感動した地元新聞が、子どもが作製した米の消費拡大広告を大きく掲載した。
- ・子どもの取組みを見守っていた地域の方が立派な看板をつけてくれるなど、子どもの取組みが地域を動かした。
- ・子どもの真剣な取組みが、指導に当たった地域の農家の考え方にも影響を与え、農業を続けることへの意志を一層確かにさせている（地域住民や農家の子どもを見る目が変わった）。

今後の構想、課題

- ・地域でしていただいたことは、地域へ返す。
- ・ふるさと活動や地域振興につなげていきたい。

その他

継続するための方策について、里公小学校では、「農の大地に根差し、子どもの心にふるさとを育む学校」を掲げ特色ある学校づくりを目指している。特色ある学校づくりの要は、各担任による特色ある学級経営にある。学級経営を具体化する場が「上越カリキュラム*」である。

各担任は、生活科・総合的な学習の時間を中核に自学級のカリキュラムを編成する。里公小学校の生活科・総合的な学習の時間では、「ふるさとの人・もの・ことに、主体的・創造的・協同的に働きかけながら学び方やものの見方・考え方を身につけ、より良い生き方・在り方を探る子ども」の育成を目指している。そのため、結果として、農や食に関わる活動内容が多くなり地域住民と関わる機会も増す。したがって、継続するための方策は、里公小学校のカリキュラムづくりの営みそのものにあるといっていよい。

* 「上越カリキュラム」：当該学年が1年間で学ぶすべての教科・領域の学習活動が盛り込まれた一覧表。学級の特色を視覚的に表現できるようにされている。



稲刈り

みんなのコメント集

取組の 実践者

教員

「さまざまな人びとと関わる機会が増え、発想の視点が広まりました」

「保護者や地域の人びとの熱い思いに触れる機会となり、やる気が出てきました」

「子どもが喜んで学習活動に取り組んでくれることが何より嬉しい」

「活動性重視の学習が多いことから、活動中の子どもの言動をみとり、必要な言葉かけや適切な手立てを講ずることができるようになりました」

「生活科や総合的な学習の時間を中核に据えた学級経営を進めるため、1年間を見通した学習活動の必要性を意識するようになりました」

「家でも野菜づくりを始めました」

参加者

児童

「本気で耕したり売ったりしたので楽しかった」

「料理したり食べたりする活動は楽しいので、もっとしたいと思いました」

「米づくりはたいへんだけど、清水さん(指導農家)のように工夫すれば儲かるんだと思いました」

「農薬は、使い方を間違えなければ安全なものということを知りました」

「食べ物の大切さ、地域の方たちのあたたかさ、お米を食べていただくうれしさを学びました」

「農業の楽しさと厳しさを学びました。もっと若い人たちが興味を持つような農業に変えたいと思いました」

「お米がおいしくて自然豊かで、三和地区の良さが少しわかった気がします」